

## あとがき

本書は、これまで私が担当してきた大学での講義がもとになっている。2006年度から2010年度まで神戸市外国語大学で担当した「米国の社会」に始まり、それは、立命館大学国際関係学部での「北アメリカ研究」に引き継がれ、2015年度で10年目を迎えた。その間に、アメリカ合衆国史上はじめての非白人大統領が誕生する一方で、とくにここ数年は、アメリカでの警察による暴力やヘイトクライムの表面化、日本でのヘイトスピーチの蔓延という暗澹とするニュースも目立つようになった。このような時事的状況を踏まえつつ、講義では、現代のアメリカ多文化社会における論争点を理解するとともに、多文化社会のあり方について体系的な知識を身につけることを目指してきた。

このような講義内容を書籍化する直接の契機となったのは、2013年度に所属学部の学外研究員制度を利用して、カリフォルニア大学バークレー校で研究に専念する機会を得たことだった。在外研究中、アメリカ社会に身をおいて多くの人に出会い、多文化社会や人種主義をめぐるさまざまな議論を学ぼうちに、これまで講義で積み重ねてきた議論に、新たな研究成果も盛り込みながら、多文化社会としてのアメリカを理解するための枠組について、学生や一般の方にも読んでもらえる書物として発表したいと考えるようになった。

たとえば、アメリカの人種主義をめぐる事件は、日本のメディアでは「根深い人種差別」という常套句で紹介されることが多い。その「根深さ」を前にして、日本では、アメリカという「特殊な社会」の事情と他者化したり、「所詮、違う人種はわかりあえない」「多文化の共存なんて絵空事」といった短絡的な一般化をしたりする声を耳にすることも少なくない。しかし、これでは何も理解したことにはならない。深く埋もれている周囲の土（＝歴史的な文脈）を丁寧にかき分け、絡まった根（＝対立の複合的な諸要因）を慎重に解きほぐし、問題を、さまざまな立場の人々の視点から考えてみることなしに、「人種差別」を理解することはできないだろう。でも、問題を分解するための道具も、それを見通すための眼鏡も、十分に提供されているとは言い難い。それが、アメリカ

の課題を、「対岸の火事」ではなく自分が生きる社会の問題として考える姿勢を身につけることを難しくしている。ヘイトスピーチや特定の背景を持つ人々への攻撃は、これまでも、現在も、そしてこれからも「対岸の火事」ではありえない。講義で心がけてきたことは、太平洋の向こうの特殊な出来事としてではなく、近現代の社会が直面してきた共通体験の1つとして、多文化社会の課題を考えることであった。

本書が目指したのも、アメリカという社会の経験を通して、多文化社会を包括的にとらえるための枠組を用意すること、その枠組の成り立ちを理解すること、そして、その経験を、日本を含む現代社会の課題と突き合わせ、多文化社会の可能性を考えるための材料を提供することであった。アメリカ多文化社会を支える人々の葛藤、制度や政策、そしてそこに体现された社会の理想というもの体系的に提示し、読者の方々それぞれが、「人種差別」の「根深さ」を、自分の問題として見据えることの一助となればと考えている。

とはいえ、研究者としても教育者としても未熟な私にとって、アメリカの歴史を見通し、その社会構想の変遷を問う本書の課題は、あまりに過大なものであった。当然ながら各分野での最新動向や複雑な議論を十分反映させるに至っていない部分もあるし、十分に目が届いていない箇所も少なくないだろう。専門研究者の方々はもちろん、実際に多文化社会実現の現場で奮闘するの方々のご批判、ご意見を賜ることができれば、本書の議論をより深化させることもできるだろう。

本書は、多くの方々の協力・助力があってはじめて世に出ることとなった。恩師、先輩、友人、同僚のみなさんの名前をすべて挙げることは難しいが、本書の原型が、大学時代に受講した辻内鏡人さんの講義にあったことは記しておくなくてはならない。多文化主義論争真っ最中の1990年代に辻内さんのアクチュアリティに満ちたアメリカ研究の講義に感じた知的興奮が、本書の出発点になったことは間違いない。そして、1年間の在外研究の機会を与えてくれた立命館大学国際関係学部のみなさん、すばらしい研究環境を提供してくれたカリフォルニア大学パークレー校のマイケル・オミ、キャサリン・セニーザ・チョイ両先生にも感謝する。また、法律文化社の小西英央さんに「拾って」いただいたことで、本書の原稿は日の目を見ることができた。本書の出版は、立

命館大学学術図書出版推進プログラムの助成によって可能になった。記して感謝したい。また、本書は、科研費基盤研究(C)「アメリカ型多文化主義の生成と展開をめぐる歴史社会学的研究」(研究課題番号 26380720)による研究成果である。

何よりも本書の出版にあたって感謝しなくてはならないのは、10年間にわたって、私の講義を受講してくれたすべての学生たちであることは間違いない。みなさんの真剣な表情、鋭い質問、温かい激励、厳しい批判のすべてが、本書をまとめる原動力となった。

現代アメリカの人種や多様性をめぐる状況は決して楽観を許すものではないが、本書が、多文化社会というものについて少しでも希望を含んだものになっているとすれば、それは、妻と2人の娘と過ごしたバークレーでの1年間があつてのことであると思う。ベイエリアの人々は、私たち家族を住民として地域に迎え入れ、アメリカ多文化社会の最良の経験を与えてくれた。本書を、そんな機会を最大限に「楽しむ」ことで、多文化社会のしなやかな可能性をあらためて実感させてくれた妻と娘たちに捧げたい。

2015年8月末日 京都の研究室にて

南川文里